

【講演】「図書館の潮流と今後の展望～質的な充実と普及から～」

(渡部)

ただ今、ご紹介いただきました渡部です。ご紹介いただきましたけど、私は江戸に来ることはあまりなくて十何年前に朝日新聞のフォーラムで来て以来の江戸・東京です。

地方がメインな私には、ちょっと場違いじゃないかと思いながら今日は紀州・和歌山の地からやって参りました。私は、ずっと地方で図書館振興に注目をされていてそれがどういうふうに進展するかを考えつつ歩んできました。

今は、和歌山という地方の国立大学に所属し、そこでの想いは地方の図書館振興等にありますが、ここにいらっしゃる皆さんは、東京近郊の方々に、この地は最先端の地となりますから、当然にカーリルさんのお話をほとんどの方が聞きに来られたと思いますが、そんななかで少し時間もいただければ大変ありがたいと思って厚かましくも参りました。

私はこの付近は多少思い出があって、東京に学生時代下宿していたのですけれど、実はこの近くに住んでいました。十二社というところですけど、すぐ近くです。この辺のところは、随分と変わったと思います。でも変わったものと変わらないものがあります。これはやはり、図書館の世界でもいえると思います。日常生活はどんどん変わりますが、基本的に変わらないものと変わるものがあるって然るべきだと思います。この周辺の景色を観ながら、やっぱりその変わらないものがあるって、変わるものは静かに変わっていくのが人々には馴染みがあるのではないかと考えています。

急激に発展するものは、急激に消滅します。そうした観点でいけば、図書館もですが、一步一步、確実に歩むというのがよいのではないかと考えています。私は、三つぐらいの視点で考えています。一つは時間的な経過、それと空間ですね。だから日本の図書館がどういうふうな展開をしているかと、世界のいろんな図書館がどういうふうに動いているかをみています。もう一つは、皆さんとは全然、視点が違うかもしれませんけど、図書館の空白地帯が、どういうふうな発展をとげていくかという点も絶えず考えています。

というのは、現時点でも図書館の不毛なところが存在するわけです。そうしたところが底上げされれば私は日本中の図書館が氷山の上に見えている部分のように、下からせり上がってくると考えています。それで小さな自治体に光を当ててみると、数十年前とあまり変わっていない。だからこそ、その場所に特に有効な手立てを講ずれば、日本中の図書館が豊かになると考えています。

私は今、和歌山の小さな自治体2か所で図書館づくりに関わっています。1か所は皆さん日曜日になると、テレビで見られるかもしれません。真田幸村の里の九度山町というところなんです。ここに図書館はないのです。九度山は幸村で浮かれているけど、次は図書館ですよということ町長さんにお話をさせていただいています。それともう一つは、マグロで有名な那智勝浦町です。

そうやって地方をみながら日本全体の図書館や世界中の図書館等の在りようをみている

つもりです。再来週はスウェーデンとフィンランドに行く予定ですけど。そこもちょっと想いがあります。

紀伊半島ですからスカンジナビア半島とは半島つながりです。その半島とか離島での日本の図書館の置かれている立場が大変厳しいのです。離島・半島域という同じ状況でありながらフィンランドやそうした北欧諸国は、しっかり図書館が肝になっている。そういう姿を自分の目で確認したいというわけです。今現在の問題関心としてはそういう点です。

そういう過疎地域だとか離島だという境遇であっても、学校は認知されているのです。誰もが「学校には、力を入れなければならない」といい、図書館は、「そんなものはいらない」といわれるのです。「そんなものはいいいや」というレベルのなかでどう図書館をつくっていくかという難しい問題です。そこを克服さえすれば図書館というものが日本中に制度化されて、明治の学校制度並みに進展すると思います。

それと、今、図書館のイメージが多様化しています。一言でいえば、エレファント、象さんの鼻を見ても、牙を見ても、足を見ても、どこかの一部を見ても本物の象です。だけど、鼻を見て象というように、例えば、図書館に賑わいが必要だが、その賑わい部分だけを図書館の総てと強調する。あるいは、足の部分を見ても、尻尾を見ても確かに象の本物には変わりませんが、部分だけ見て全体像を見ずして図書館を論じている現在の風潮を私は危惧しています。

どうしてそういうことになるかといったら、図書館を機能的にみているのです。で、学校と比較すれば分かりやすい、学校は、基本的には勉強をするところです。しかし、世間一般は勉強だけが学校の役目でないことを知っているのです。国語、数学、英語、社会といった教科があって、学校の先生の仕事はそれだけではないのです。教科外には学級経営があったり、クラブ活動があってプラスバンドに熱中したり、世間は全体像として学校というものをとらえている。

一方図書館はどうかといったら、もう、細分化された世界を最先端の図書館だとして、どんどん一部分だけを追求すると、全体像を見失うのです。

私は田舎でずっと生活していて、田舎のことをよくわかります。青年団運動というものに多少関心を寄せたことがあります。1963年の中小レポート刊行と同時期の東京オリンピックの開催前後頃から国内では都会と田舎の格差が広がりました。次のオリンピックのときがどうなるかというのも、私には興味深い。前回大会の1964年前後を境に、青年団運動が衰退化する。若者は都市に流失し、農村では青年団の基盤がなくなってしまう。一方で都市では青年団に代わって機能的な集団としてのグループサークル花盛りとなる。

ところが都会からも農村からも青年団が消えたけど、そのなかで大分の佐伯中央青年団は青年団とはなにかということを徹底的に議論して、結果的にそして都市部のなかで青年団を再生させた。これはですね、図書館の世界でもいえると思っています。やっぱり原点に帰って図書館とはなにかということから始まらない限りは図書館の色が薄くなっていきます。

私の大学のある先生は「もう AI の時代だから図書館司書なんか消えていく職業だ」と講義している。私もそう講義したいところですけど。実は逆に AI の時代だからこそ人間の力を必要とする司書が重要と思います。

AI のブームをみれば確かにそのような時代になっています。何年か前にアメリカの本がない図書館というものが紹介されていきました。それは一部の電子情報化された結果かもしれませんが、それが図書館の全部かといったら、私はそうじゃないと思います。

そうすると、どういうものを図書館かといったら、私は、やっぱりさっきの学校の話じゃないけど図書館の全体像を掴みながら、そしてその図書館像をイメージしながら、それを目標として、日々チャレンジしてゆかないと図書館というのはなかなか目的を遂げられないし、学校でもこの学校は必要かというときに、クラブ活動だけをしている学校は必要とされないかもしれない。

でも全体像の図書館が地域の方々、いろんな方々に伝われば、これは役に立つから必要というようになってくると思います。その視点がちょっと欠けているのです。

それと、図書館にはやっぱり高度化した専門職が必要だと思っているのです。

だけど、専門性というものがだんだん薄くなってきている。先ほどのように、機能化した図書館だとすれば、マニュアル化されたパッケージ化図書館がどんどんと各地にできるのです。マニュアルさえあれば操作員で動く。分担のラインを忠実にやれば余分なことをしなくても動きます。そういう姿を目指していくと、これはもう専門職ではなくて、人ならば誰でもよくなってくる。全くの操作員のレベルの図書館になってしまう。現状はそのような危険性をはらんでいると思います。ますますそのような傾向が強まっています。

それで周辺の専門職の関係をみれば、例えば獣医師さんたちは、絶え間ない努力をしています。戦後間もない頃のスタートはひょっとしたら司書と同じくらいの扱いだったかもしれない。昔は養成機関としての農学校で獣医資格が取れたのです。その後に養成機関は戦後になって四年制の大学になりました。その後 1970 年代には六年制になりました。

それでは、図書館の養成機関はどうかというと現状、あまり変わっていないのです。現状変わっていないということは、後退していると私はみている。だからこそ、時系列で周辺の専門職の養成事情も含めて、「相対的な司書の地位の評価をすべきだ」というのが私の問題意識です。司書の専門性の位置づけは進歩しているのか、後退しているのかということになると、間違いなく後退していると考えています。

図書館の潮流と節目といいますか、変わり目のことについて触れてゆきたいと思います。このテーマのようなことを今年 3 月に西安交通大学のシンポジウムにお招きいただいて次ようにお話をしました。やはり全体像をみたら世界的な潮流のなかで図書館はだんだん、変化していると考えています。

これは、私が勝手にした区分なのですけど、1950 年は図書館法が制定した年です。皆さんご存知のように中小レポートは 1963 年です。この 1950 年から 1970 年の間に中小レポートが出されるわけです。1970 年ぐらいから中小レポートの影響を受けた「市民の図書館」

が普及してくる。これは会場の皆さんは、ご同意いただけると思います。

そしてその後の1970年から1990年までの時期は、「市民の図書館」が普及する時代だった。要するに今まで管理中心の図書館から市民に使われる図書館に皆さんのような館員の努力によって変わった。

でも、1990年前後、急速に図書館の姿が一変します。これは、私の認識ですけど、コンピュータが図書館に普及してくるのです。今まで字が綺麗で、手作業での目録を作成したり、出納作業をしたりしていたけれども、その必要もなくなり仕事が一変します。その当時の議論を思い出すと、「そういうものが普及したら図書館の仕事を奪われる」と反対をする方もいました。でもこれは時代の流れなのです、逆らうというわけではなくて、うまく利用し、対応すべきだったというのが、私の当時からの変わらない気持ちです。

この1990年頃以降、大幅に図書館は変化するのです。それは二つの流れです。

一つはですね、従来通りの、従来通りっておかしいですけど、定型的な金太郎飴型図書館の方向へとそのまま突き進んでいく。それに新たなコンピュータの技術を駆使して、私からすれば工場に近い図書館がどんどん増えて行ったのです。そうするとこれは「誰にでもやれる仕事」といったら大変失礼ですけど、現場よりはある程度賢い少数のコントロールタワーが外部にあっても、一応は回っていく図書館、創造力不要の機械的な図書館の構図です。これが金太郎飴図書館で現在でも引き継がれています。もう一つの流れは機械よりは人間重視のあり方の追求の道です。

この一方の動きは新しい変化に対応しようとしたものだと思います。図書館は今までどちらかといえば貸出の窓口のだけの機能的な空間だった。その管理しやすい、リスクコントロールしやすい、ワンフロアの箱型・方形の構造をもつ図書館からの脱却を目指す動きになったと考えています。いわゆる滞在型図書館の登場です。

そして、1990年以降、やや危機意識をもって滞在型だとか、それ以外の多様な価値を求める時代が進んだと思います。それで図書館が今までの一つの単一の機能のイメージから多様な図書館のイメージが1990年以降は広がったと思います。その頃は日本では、まだまだ図書館不要論なんかは、出てこなかったと思いますが、1990年当初にイギリスに行かせていただいて、イギリス国内を周っていたら、関係者から未来を予測して理科系を中心に図書館不要論が出てくると聞いた覚えがあります。それで危機意識をもった図書館の方々が、特に大学図書館の関係者が中心でしたが、ラーニングコモンズとか、アクティブラーニングというような考えを広げた。それが一定の成果をあげて図書館に利用者が回帰するような状況となったのです。

1990年代は、役所だとか事務所にパソコン、コンピュータが普通に普及していった。今では、スマホに代表されるように個人個人の日常生活上にどこでもそういう情報にアクセスできる時代になっています。それでまた図書館の状況が一変していると思っています。こういう状況を踏まえて少しずつの図書館の変化すなわち次なる飛躍の芽として出始めているのが“課題解決型図書館”だとか、“まちづくりに取り組む図書館”の出現とみていま

す。このような大きな流れのなかに図書館はあると思います。

これは、皆さんのご認識とは違うかもしれませんが、私はそういう認識でもって今の図書館の立ち位置といたしますか、現状を把握し、次にどういう形で展開をすればよいかということを考えているつもりです。今求められている地域の図書館づくりにはそうした視点が必要だと思います。

それと、1950年に図書館法が制定されて、2016年ですから66年経っている。そして中小レポートが刊行された1963年からは、もう53年も経過している。しかしながら2015年の『日本の図書館』の統計ですが、10の市に図書館がまだないのです。そして281の町にも、そして136の村にも図書館がないのです。したがってこれらの地域は図書館法にも中小レポートにも影響されていない地域ともいえるのです。

離島とか半島の地理的な条件は、ほとんどの皆さんは生活者でないので具体的にイメージできないと思いますが、そこでの生活は、この東京とか、大都市周辺、陸続きのところとは大きく事情が違います。大都市周辺では、広域利用という形で、隣の市町村に行けば図書館のサービスを受けられますが、これが和歌山県のような半島域では、明日いくつもの那智勝浦まで和歌山市内から車で3時間、特急電車で3時間の距離です。これは普通の県であれば隣の更に隣の県に行く感覚です。

例えば三重県に囲まれた北山村という飛地があります。そこから近隣の図書館までいくのに自動車でも30分、40分かかり、同じ和歌山県内の図書館に行くには1時間以上もかかります。そうすると図書館に出会うことなしに生涯を終えられる方々も多数存在することとなります。でも、そうした未設置自治体でも図書館というものが重要という声が上がらない限りは図書館は設置されない。その地の未設置状況の解消なしに日本全体の図書館振興には繋がらないと私は考えています。

それで、これからの図書館員の方向性というものを考えると、まずは職員の専門性が問われている時代だと思えます。パソコンの操作をカウンターで扱うだけのレベルだったら専門職とはいわない。これは、マニュアルを渡して忠実に指示通りに素人を訓練すれば誰にでもできます。それで今までは取り組めていない機械的な仕事以外の仕事に取り組む創造力が問われている時代だと思えます。それは高度に発達した時代に新たに生まれた仕事であり、これまで取り組めていない仕事でもあります。例えば、いろんな情報を駆使して館員が噛み砕いたものを提供するとか、あるいは電子情報では得られない隙間にある情報も視野にいった情報提供等々。そうしない限りは、図書館という館がいらなくなるかもしれないし、今後は図書館のもつ機能のより多面的な活用が求められていく時代とも考えられます。

現在に合った創造的な仕事に変わる、図書館の転換期だと思っています。これからは、多様な図書館メディアを駆使して状況にあったサービスが求められていると考えます。医療で例えれば患者を観察し状態に合った処方箋ができるような漢方医でないといけな。現状を分析し、状況に応じた個別対応のできる司書ということになります。私は漢方を利用しているのですが、漢方医さんはデータも出しますが、患者の舌をみたり、脈拍をみたり、

顔色をみたりします。その全体を見ながら病気を判断するのです。図書館の司書も同じで利用者だとか、地域だとか、その時代を客観的に分析できるような専門性が求められている。その中身も問われていて、広く浅くというのは当たり前で、今問われているのはひょっとしたら可能な限り、広く深くかもしれない。だから、これは5年とか10年の仕事ではなくて、ずっと絶えず研鑽が必要な仕事が続くということが前提です。

だけれども現状を見渡せば、4、5年でどんどん図書館員が替わっています。それでは専門的な力は蓄積されない。だからそうした広く浅くから、深く広くの時代に対応できるようなポジションを獲得する必要があります。生涯を通して研鑽の必要があるのが専門職でもあります。

利用者の信頼を得られる力量が備われば利用者はやはり賢いですからこの方にこう相談すれば、なにか解決できるのではないかということで相談にくる。そして解決できれば更に信頼される。そうした信頼の積み重ねができるかどうかというのも非常に重要だと思います。機械的でない人間力、教養力です。教養力ってなかなか重要で、抽象的かもしれませんが、豊かな教養力は汎用性が高い。現在も私の大学には司書養成課程がありませんけど、養成課程は学部構成が非常に似通った大学からの司書が養成されるパターンだと思っています。もっともっと幅広い学部から養成ができればよいと思っていますし、学際的な視点からも幅広さが重要だと思っています。

これはちょっと乱暴な意見かもしれませんが、極端なことを申し上げますが、例えば、高校から大学進学時に理科を捨てた人が司書課程に学んで、そしてスタッフ全員が文科系の司書ということもあり得ます。そして理科の選書に関わるということも起きます。これではバランスを欠きます。これを学校と比較すると、高校は各教科、それぞれ専門の分野の教師集団となります。だから図書館も同様に各専門をベースにした学際的な集団、職員集団というものを形成できないかと私は考えています。それで、先ほど極論を申し上げましたけれども、理科を捨てた人が理科の選書をしなくてもよいし、理学的な興味をもった方々にサービスを提供するという事になったときには自分の出身の学問領域をもっていれば、文化系の方々よりは痒いところに多少は近づけるわけです。そうして異なる分野出身の職員集団が個々の得意分野を活かすこととなります。なによりもそうした集団が形成されることを私は望んでいます。

不易流行の図書館を目指すべきだと考えています。これまでサービスとして重要視しなかった置き去りにされたサービスにもアプローチすることも必要です。これはけしからんというお話もあるかもしれませんが、1970年代の「貸出サービス中心の」図書館観というのは、それ以前の50年から70年ぐらいまでの間の保存指向型図書館の時代を反省し、ともかく「図書館はこういう便利なものですよ」と、その使える図書館の姿を証明する必要があったと考えています。使える図書館に脱皮するためにやはり戦略的な意図をもって、サービスを展開したと思います。それは、当時としては必要だったと評価しています。その時代にはその手法が必要だったと考えています。

その時代の時代背景や諸々を考えると時代が進化したときに、次のステップをどう考えるかということが重要と考えています。新しい時代にそぐわない部分もあるかもしれない。そう考えれば図書館法が制定された時代のものは古いというかもしれません。そこに書かれている文言なんかは、私には古くもなく、今でも十分通用すると考えております。これは、もしそれに不都合があれば館界や国民が国会を通して図書館法を改定して内容も変えればよいわけです。

図書館法を熟読すると、今にも使える文言が沢山あるのです。それを真正面から実現するような努力が必要だったわけです。国内的には法治国家ですからコンプライアンスの観点からも法の実現は日本国民であれば当然です。ただ、図書館というものが万国に広がっていますから世界共通の言語でもありますので世界水準の図書館も一方で希求しなければいけないと考えています。ユネスコの公共図書館宣言に書かれている文言の図書館像も希求する必要がありますとも思っています。この図書館像は世界中の人々が認識しています。私もこの数年間、十数か国の図書館を周ってきました。そこでもユネスコの公共図書館宣言に違和感を覚えるような状況には遭遇しませんでした。これは、国内的ないろいろな発展段階の違いがあるかもしれませんが、それぞれの地の各図書館活動というものが世界に繋がるものだという事をあらためて認識している次第です。そうするとユネスコ公共図書館宣言の中身を自分の町や地域で実現することも重要なことでもあるわけであります。

あの文言のなかにはいろいろありますが、例えば公共図書館の使命、後の資料のなかに出てくると思いますが、芸術に触れる機会をつくるというような文言があります。これをみれば、図書館でコンサートをやっているのはユネスコの公共図書館宣言の履行でもあるわけです。実際にはアムステルダムの駅の近くのアムステルダム公共図書館のロビーでピアノの演奏を見かけたことがありますし、フランクフルト中央図書館でも全く同様でした。滋賀県の愛知川図書館の玄関でも演奏を行っておりました。この点は旧来の図書館観でいえば図書館での音曲は禁止事項となります。静寂とピアノの演奏という真逆の姿も混在している状況です。しかし、図書館で必要とされるならば実現できるシステムが必要と思います。国内にあっては、図書館法というものが有りますから、こういうことも考えなければいけない。その図書館法にはレコードの収集についても謳われています。

一時代前も今もレコードは古臭いと思っていたかもしれませんが、今、レコードがブームになったりしていますし、イギリスやフィンランド等のヨーロッパの国々の図書館では、レコードのコレクションが沢山あったりします。かなり自由度の高い内容が図書館法や公共図書館宣言のなかにも謳われているわけです。

地域の実情だとか、情報リテラシーとかさまざまな事柄も取り組めるようになっていきます。今の時代のなかでも使えるものがかなりあります。そうすると自分の館で工夫しさえすればその地域やその置かれている状況でもっともっと、自由に伸びやかに図書館活動ができると思います。

それと、教育基本法の教育機会均等の原則がありますが、これは重要な後ろ盾です。特に

移動が困難な離島半島域では教育施設配置の必要な根拠ではないかと思います。いろいろ議論があって、図書館は教育機関か、そうでないかというのが議論もありました。生涯にわたる学びという生涯学習の観点に立てば、離島であろうとこの東京のど真ん中であろうと、学ぶための条件整備に努めて学習機会を保証しなければいけない。その重要な拠点を私は図書館だと思っています。特に離島・半島域、更には過疎地域の交通の不便な場所には必要です。

台風が来れば船が欠航します。非常に厳しい自然環境です。そこの人たちの暮らしを守る立場で、経済的に負担がかからないような状況で、NHKの放送がどこでも通じると同様に図書館というものが全国津々浦々、張り巡らされるべきだと考えます。それで具体的にイメージするのは、離島・半島域の町や村でも生涯学習ということを考えていけば、通信教育の活用です。科目は限定されるけど、高等教育が受けられるわけです。そこでは、放送大学の大学院という道だってありえる。学ぶ環境を整えば可能な話です。そういう環境には質と量が求められている。図書館サイドでいえば集まるだけの空間ではなく、信頼に応えられるような資料群です。そうした内容のものを用意すべきだというのが私の主張です。

ユネスコの学習権宣言は、まさしく、いつでもどこでも誰でも学べるというような宣言ですから、地域によって、条件が厳しかったりするとこれはその宣言から外れるわけですので、どんな地域であろうと、実現できるような社会、それに相応しい図書館というものを私は目指すべきだと思っています。

今後の展望ですが、やはり図書館を支える人材養成というのは重要です。今は、司書職がどういう採用の状態になっているか詳しくわかりませんが人が要であることに変わりはありません。若い人が、定年の歳までずっと仕事が続けられるような、そういう養成制度や仕組みをつくらなければいけないと思います。若い人が4、5年で雇用止めということになれば、やる気があっても、なかなか生涯の仕事とするという気持ちが動くとはならない。養成制度まで含めて次のその雇用の問題まで考える必要があると思います。それと司書資格のアップグレードといいますか、相対的に地位が低ければ地位を高くする必要があります。

先ほど、獣医さんの話をしました。昔、看護婦さんといわれた3年制の看護専門学校、今4年制の大学になっています。それぞれ自分たちの専門職の地位を上げる努力をしたのです。足を引っ張ることもなく。自分たちが低い地位であっても、次世代には認められるように専門制度のあり方を学術審議会等々に働きかけをしています。そういう地位向上の取り組みもやらなければいけない。

求められるのは視野の拡大です。ミクロの世界の専門は皆さんおもちのもので十分と思いますが、全体を鳥瞰して、組織全体を動かす仕組みをつくれるような企画力というのは非常に求められます。経営理論でいくとPDCAサイクルのような、そうした経営の観点に立って次から次にその展開を考えられるような能力が今求められています。

それができないと、図書館以外の外部からどんどん攻め込んできます。図書館の自立が必要です。やっぱり、図書館の方が図書館のことを考えないと、外から動かされる集団となり

ます。歯車としての人材のレベルにしか留まれないのです。これは暴論かもしれませんが、それを脱しない限りには、自分たちが描いた図書館には、なかなかたどり着けないのです。

去年の12月に、和歌山県の新宮市の住民団体の方から、ご講演にお招きいただきました。そして私は、今のようなお話をしたら、新聞記者の方が「このような状況の実現までは1世紀か2世紀かかりますね」といわれた。「いや、その通りです。今のままでは」と答えました。どこかで負のスパイラルを断ち切る必要があります。もし皆さんが図書館を真剣になって今後も図書館の発展を願うというお考えでしたら、今から未来に向けた準備をしないとイケない。

恐らく、今の状況だったら先細りしていきたくらうと思っています。よその学部の授業を聴いていたらなくなる職業の筆頭に司書が挙げられていました。世の中の人には、やっぱり客観的にみているのかな、現状ではとも思います。今後も、図書館が図書館であり続けたためには、私は古いかもしれませんが、図書館法に書かれていることやこのユネスコの図書館宣言に書かれている文言の実現と思います。真正面から挑み、もう戦略的に普及する時代じゃなくて、質を高めてそしてその質の良さが認知されて普及する時代に来ているのだと思います。

だから、今こそですね、そうした質を高めるような努力が図書館界に求められているのではと思います。それに図書館の三要素は、人、施設、資料とされていますが、人、人、人、人というように人の働きがそれほど重要です。かつて、ブレア首相が、教育、教育、教育、教育といったように、図書館界においても、繰り返しになりますが、やはり人、人、人、人です。でも、それぞれの役割を果たす人がいると思います。専門職という方々の人の問題もあります。そして専門職を支える人も確保しなければいけない。構想を練る人もいるのです。これは一人で完結できるかもしれませんが、こういう体制がないとなかなか将来図が描けないと思います。

このままの無策状態ではあっという間に1世紀、2世紀すぐ経ちます。だからそこを再度、問題意識をもって現状を変えなければなりません。

さて、今からお話する、図書館長さんはかつて、本来の職務からいつ逸脱しているとしてやり玉に上げられた時期がありました。今も非難する人がいるかもしれませんが、でも、今の一般的な館長よりまっとうな姿勢とも思っています。

山本作兵衛という人物がいました。山本作兵衛は、炭鉱労働者で福岡の炭鉱で生涯の仕事として働きました。そして退職後、図書館に通います。図書館に来た山本作兵衛と永末十四雄という館長が出会います。その出会いによって、山本作兵衛は自分の生活体験とか炭鉱労働のことを数百枚のレベルで書き始めます。その解説書付きの炭坑絵が福岡の出版社から出版されて世の中の人に注目されます。さらにそれが福岡県指定の民俗文化財となります。それだけで終わらなかつたのです。その後には作兵衛さんは、亡くなりました。2000年代になって、それを再評価する動きとなります。そして世界的にも価値あることとして世界記憶遺産に登録する運動が起きます。それが見事に2011年に登録される事態となりました。そ

の田川での作兵衛さんの仕事が、死後かなり経った今では、町の誇りになっています。

永末十四雄の図書館長として山本作兵衛と関係した役割が長い期間を経て評価されています。だから、貸出中心の図書館も必要でしょうが、今、それにプラスした関わり中心の図書館が重要と考えています。

それで最後の最後に、私と一緒に歩んできたおばあちゃんのお話をして終わりとします。後藤絹さんという方です。作兵衛さんの本を見て、イメージがどんどん膨らんで74歳のときに創作活動を始めます。

農業一筋で、子供6人育てて、過酷な労働に耐えてきて、紙粘土細工に74歳で出会います。そして作兵衛さんの本に触発され、農村での自分の生活の全てを、人形として千体以上に表現します。その後、87歳で亡くなります。今、その後藤絹さんの人形は伝承館としてこれらが飾られています。後藤さんが亡くなる直前に、「私にもう一つの自分の人生を歩ませて下さった。ありがとう」といわれました。

今は、町の宝物となっております。そして地域の皆さんの郷土を知る一つのツールにもなっていますし、町づくりに貢献しています。

結論からいえばいろんな意味で図書館は、全ての人たちの可能性を引き出す装置です。それをどう図書館が関わるかが大事だと考えています。それで、今は図書館に関わるさまざまな情報と利用者を結ぶ積極的な関わり中心の時代になったとも考えています。時間が1分ぐらいオーバーしましたが、ここでお話を終わりたいと思います。ありがとうございました。